

瀬洲村跡遺跡 (NHS I)

所在地：羽地地区源河 ^{メーガーバル} 前川原
時代：グシク時代後期～近代
概要：源河部落の東側の丘陵中腹の標高約45～70mの地点に立地する。海岸より約1km内陸に入った所の、西向き斜面にあたる。北西に海が開け、屋我地島、運天、古宇利島がみえ、西側にも大グシク遺跡などがみえるが、南側から背後の東側は山によって視界がとぎされる。

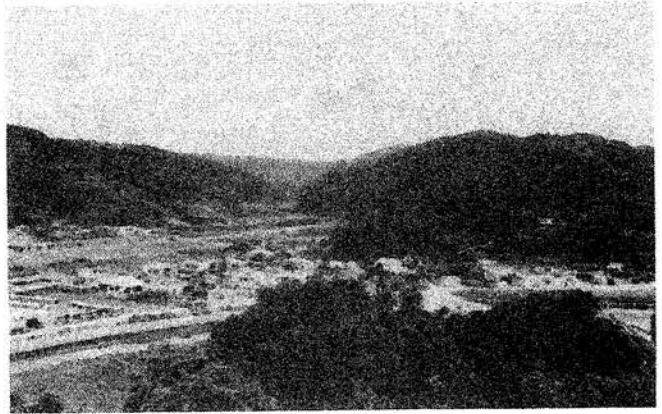


写真4-2 瀬洲村跡と源河大グシク遺跡遠景

現在は大部分がミカン畑として利用されているが、その一帯と上部の拝所、また北側下方の畑や住宅地よりグシク時代の土器や、グシク時代～近代の染付、青磁、沖縄製の荒焼、上焼などの陶器片が採集される。

伝承：現在の源河部落は、大グシク付近のタバルやミズバルなどのいわゆる源河と、この瀬洲が合併して成立したという。瀬洲が最終的に丘陵斜面からおりたのは昭和2年で、大正時代までは、「源河と瀬洲はマキューがちがう」といわれていたそうである。

所見：これまでの遺物散布範囲は略図に示すとおりであるが、ヌブイジヨウ、メースクワ、クガチャーの跡といわれる付近にもひろがる可能性がある。現在の源河部落は、もとは大グシク遺跡と瀬洲村跡遺跡の、少なくとも2ヵ所のムラにわかれていたと考えられる。

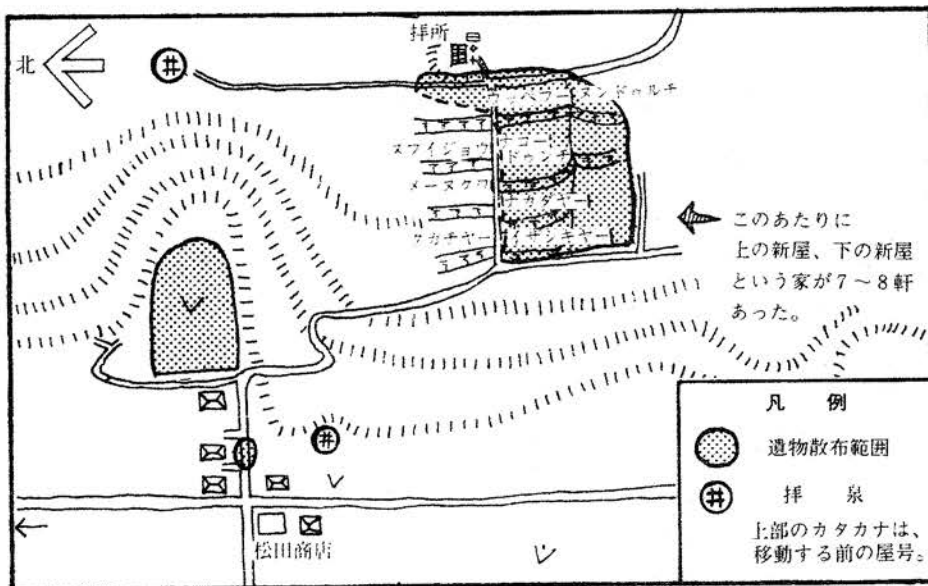


図4-3 瀬洲村跡遺跡

源河大グシク遺跡 (NHUG)

所在地：羽地地区源河 トウフル 桃原

時代：グシク時代後期～近世

概要：字源河の平野の中央奥、北側に向って突き出た丘陵の北側斜面、標高20～40m 付近に立地する。グシク時代の土器や類須恵器、中国製青磁、南蛮陶器などと、近世の中国製陶磁器、沖縄製陶器が採集される。この付近には2ヵ所の拝所があり、下方の拝所の東隣りには小規模な石垣があるが、遺跡との関連は不明である。また、東側斜面下にはユビガーと呼ばれる拝泉がある。

伝承：この丘陵上の拝所のうち、上方の拝所を大グシク、下方をギンカンスー、またはギンカンスユウ（源河の主）と呼んでいる。これらは平良門中と新里門中が中心になって拝むそうである。

所見：この遺跡内には近世の陶磁器類も多く、近世までは何らかの家屋があった可能性がある。現在の源河部落が成立する前のムラのひとつだと考えられる。

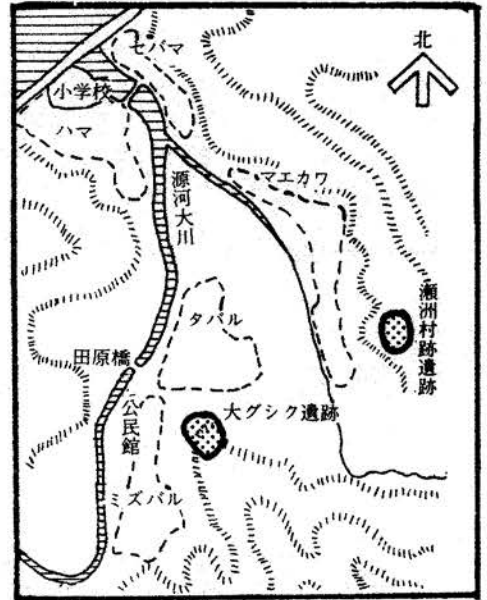


図4-4 瀬洲村跡遺跡と大グシク遺跡

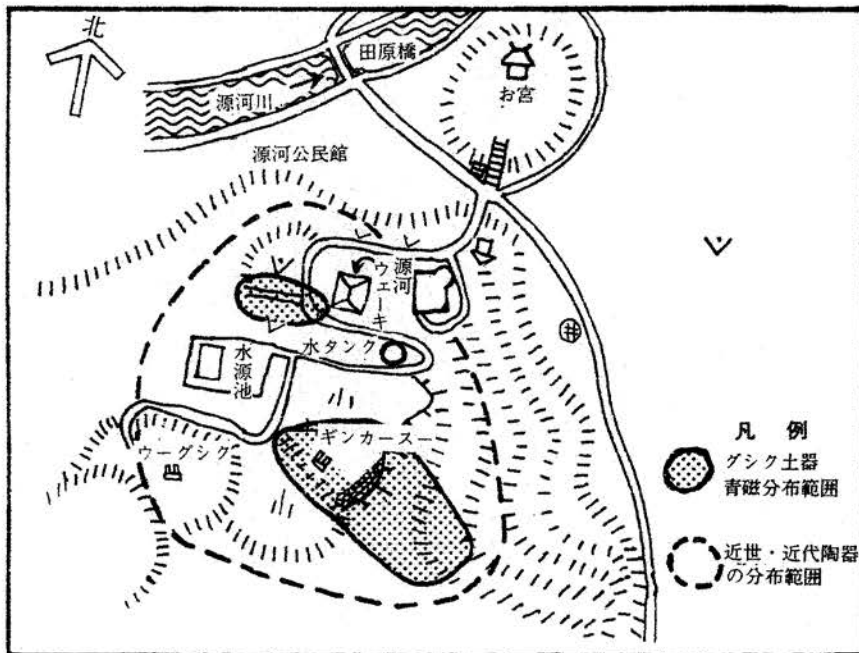


図4-5 源河大グシク遺跡

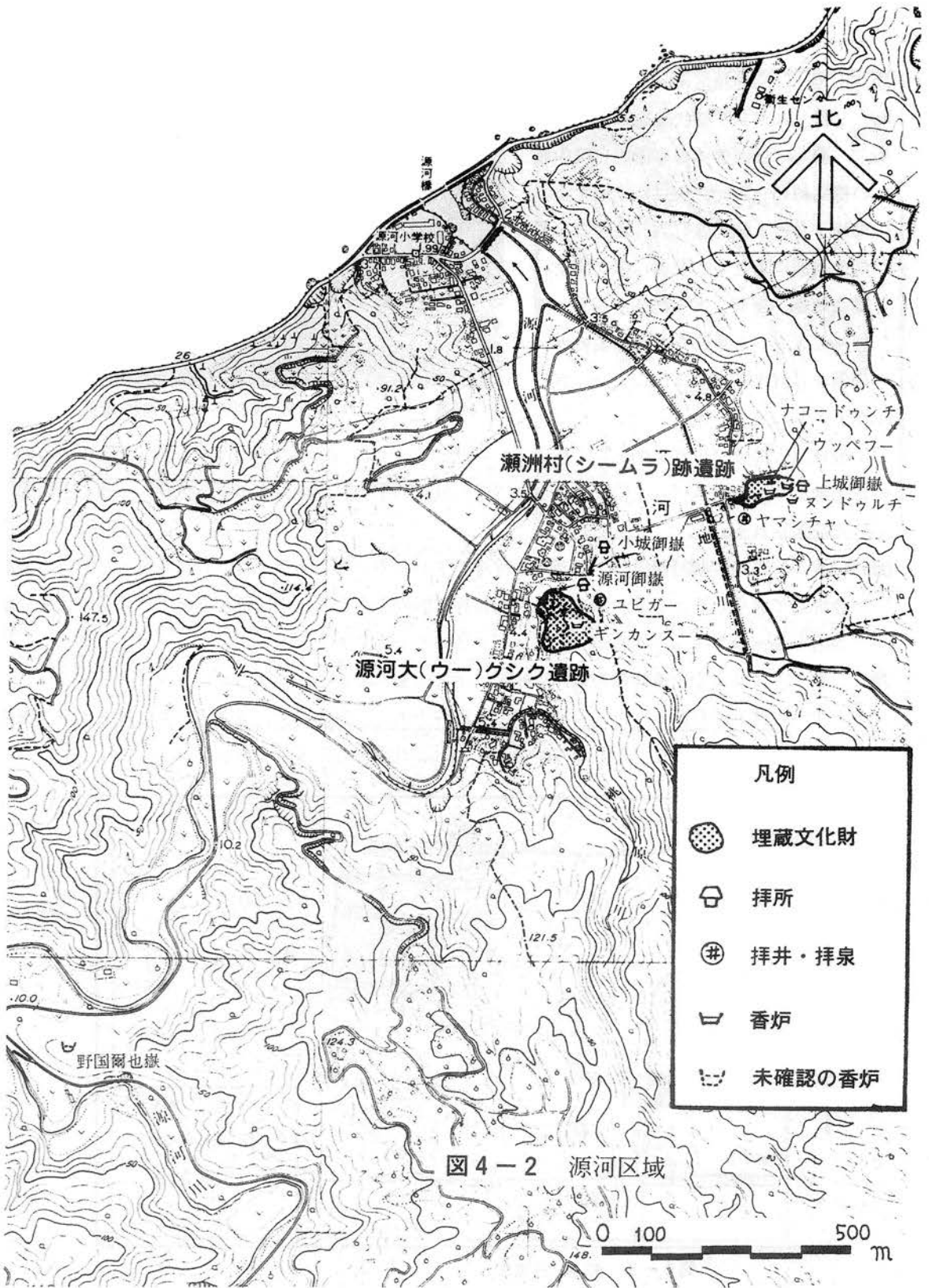


図4-2 源河区域